国立国語研究所学術情報リポジトリ

医学書テキストのたとえる表現 ： 「ような」、接尾辞「様（ヨウ）」の特徴

著者	三枝 令子，本多 由美子
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	6
ページ	178-189
発行年	2021
URL	http://doi.org/10.15084/00003491

医学書テキストのたとえる表現

—「ような」、接尾辞「様（ヨウ）」の特徴

三枝 令子（専修大学）
本多 由美子（一橋大学・国立国語研究所）

Illustrating Expressions in Medical Texts: Characteristics of “youna” and the suffix “you”

Reiko Saegusa (Senshu University)
Yumiko Honda (Hitotsubashi University / NINJAL)

要旨

医学の分野では、医師が患者の状態を把握する際「頭が割れるように痛い」といった「たとえる表現」が少なからず用いられるという。本発表では、「医学書」に現れる「たとえる表現」のうち、特に頻度の高い「ような」と、語源が同じ接尾辞「様（ヨウ）」を取り上げ、用法、特徴を分析した。調査には医学書 3 冊のテキスト（延べ約 305 万語）を用いた。分析の結果、①「ような」には、指示、比喩、例示用法等が認められるが、比喩用法は、被修飾名詞が痛み、動きなどの感情・感覚名詞の時に現れること、②「用言＋ような」「のような」「様」と前接表現の叙述性が薄れるにつれ、後接の表現が固定化していき、一語性が強まることが明らかになった。

１．はじめに

発表者らは、日本の医師国家試験を目指す外国人学習者への日本語支援を目的として、医学教材の開発を目指している。そのためには医学書の言語学的分析が必要不可欠である。

医学書は医学に関する専門的知識が網羅されている専門度の極めて高い文献でありながら、一方で、「ような」等を使ったたとえる表現がよく用いられている。その表現によって、医師は患者の病気が絞り込めることがあるという。医学書でのたとえる表現は、修辞的な目的によるものではなく、読み手に正確な情報の理解を促すものだと思われる。しかし、これらの表現は文化に依存する部分があり、医学を学ぶ非母語話者の学習者には用例の提示が必要である。

本発表は医学書テキストにおけるたとえる表現の一端を明らかにする目的で行う。たとえる表現のうち、頻度の高い「ような」と、「ような」と語源を同じくする「様」の接辞用法をとりあげて、その語彙的特徴を見ていく。「ようだ」類の分析は、従来文学作品を対象にして行われることが多かったが、本発表では医学という分野、そして連体修飾の「ような」と接尾辞の「様（ヨウ）」に限定して、その特徴を見てみる。

２．先行研究

２．１　「ような」の先行研究

「ような」は「ようだ」の連体形であるため、「ようだ」の中で論じられることが多い。「ようだ」に言及している研究は多く、分類についても、国立国語研究所（1951）、田中（1971）、今西（1985）、森山（1995）、安田（1997）など少なからずある。しかし、その多くは用例を文

学作品からとっており、特定の専門分野に限定して連体修飾用法の「ような」をとりあげている研究は見当たらない。

本稿では、分析にあたり、医学書テキストにおける「ような」の用法は「比喩」「例示」「指示」の 3 つに分けられると考えた。はじめの 2 つは、森山（1995）の分類基準に従ったものである[1]。さらに用例の観察をもとに「指示」を加えて 3 つとした。「指示」は広くは「例示」に含まれるが、文中でほかの文を指すときにのみ用いられる点、また、用例数が突出して多いことから分けた。

２．２　接尾辞「様」の先行研究

たとえる表現の接尾辞「様（ヨウ）」は、名詞の下に付いて、「㋐ある物に類似していることを表す。…ふう。…のよう。「刃物様の凶器」「皮革様の素材」」（『デジタル大辞泉』）、「例示を受けてそれと同様の事物・事柄を漠然と表わす」（『日本国語大辞典』）と説明されている。

野村（1978）で、接尾辞の「様（ヨウ）」は、「…のヨウス」「…ラシサ」といった意味をそえる接辞性字音語基として、「的」や「状」と同じ分類で紹介されているが、用例の考察はされていない。

３．データと調査方法

３．１　データ

データは以下の 3 冊である。1)と 2)は、長年現場の医師によく利用されている手引書、3)は医師国家試験の参考書としてもっともよく読まれている医学書である。

1) 『今日の治療指針 2018 年版』
2) 『今日の診断指針　第 7 版』
3) 『year note 2020 年版』

この 3 冊の本文テキストを抽出し、句点で終わる行のみを分析対象とした。総語数は 3,049,663 語[2]（記号・補助記号・空白を除く）である。

３．２　方法

全文検索システム『ひまわり』ver.1.6.9 を用い、分析対象のテキストにおける文字列で「よ

---

[1] 森山（1995）は、「よう」の多義性を類似性を軸に分析している。森山は、ＡとＢという二つの項の同一関係は、論理的には、同等・包含的か、不一致か、不明かの三つの場合しかないとして、「ような」の多義性を以下（p.493）のように整理する。
(1)ライオンのような動物がアフリカで取ったビデオに写っていた。
→　ライオンかどうかわからない。：推量的な意味：不明関係
(2)ライオンのような犬がいた。
→　ライオンではない。：比喩的な意味：不一致関係
(3)ライオンのような肉食動物は生肉からビタミン類を摂取する。
→ ライオンもそうである。：例示的な意味：包含関係
森山の(1)~(3)は、それぞれ推量、比喩、例示と呼ぶことができる。森山では、分類が恣意的になりやすい比喩と例示を不一致か包含関係かで分けており、本稿でもこの基準を取り入れた。なお、推量用法は今回のデータにはなかった。

[2] 語数は、形態素解析器として MeCab（Ver.0.996）、解析用辞書として IPADic（Ver.2.7.0）を指定し、独自に開発した「医療語彙辞書」（115,897 語）を追加して形態素解析した結果による。

うな」および「様」を検索し、目視で前後の文脈を確認して、該当する用例を抽出した[3][4]。抽出した用例は、形態素解析をした結果を利用しながら、前接表現と後接表現を目視で特定し、まとめた。該当する用例、前接表現と後接表現の特定の際には、筆者 2 名で別々に調査した結果を合わせて協議し決定した。分析の際には、前接表現、後接表現ともに、(1) の下線部のように、たとえる内容がわかるような長単位で取り出した。また、後接表現は「前接表現＋ような」を直接受ける部分としたため、「ような」の直後ではない場合も見られた。

(1) 胃内/に/食物/が/停滞/し/て/いる/よう/な/上/腹部の/重圧/感/で/, /主に/食後/に/み/られる.
前接表現　　後接表現

４．結果

４．１　「ような」の特徴

４．１．１　全体の傾向

今回のデータの「ような」総数は 960 であった。「ような」の前接表現は、「の」によって後接部分につながる場合と用言によってつながる場合とがある。前者には連体詞「この」「その」等の接続も含む。内訳を表 1 に示す。

表 1　「ような」の前接表現

接続	頻度	割合
「の」接続	573	59.7%
用言接続	387	40.3%
計	960	100.0%

全体として用言より「の」による接続のほうが多い。「の」による接続では、指示用法が多い。(2) (3) に指示用法の例、表 2 に指示用法の高頻度語と頻度を示す。

(2)　ＭＳが軽度であるにもかかわらず労作時呼吸困難を訴える場合がある。このようなときには運動負荷エコー検査が用いられる。

(3)　測定した血糖値が高値あるいは低値であった場合，なぜそのような値が出たのか考え，記録用紙に理由を記載しておくことを患者に説明し記録してもらう.

---

[3] 「ような」を検索し抽出した 968 例のうち、「ようなので」1 例、「ようなら（ば)」7 例を分析対象外とした。

[4] 接尾辞「様（ヨウ)」を検索した結果、2,348 例が抽出された、そのうち以下の 1,528 語による用例は接辞「様」を用いていない例、「A 様 B」の形式が抽出できない例とみなし分析対象外としたため、分析対象は 820 例となった。なお、器官名は分割できない一語とした。
【除外した語】別語 1,378 語（同様 634，様々409，多様 150，様式 107，様子 43，模様・一様各 9，様相 5，皆様・紋様・様体・様態・異様各 2，様変・以下の様な各 1)，水様性 44 語、器官名 38 語（毛様体 25，網様体 12，毛様溝 1)，「様」に助詞，記号，空白が後接し、「A 様 B」形式ではないと判断したもの及び B が特定できなかったもの 68 語
　なお、「感冒様症状」と「感冒様の症状」のように同様の表現で「A 様 B」だけでなく、「A 様の B」という形式も見られた。本研究では「A 様の B」も「A 様 B」に含めて集計した。分析対象 820 例のうち、「A 様の B」は 151 例であった。

表 2　「ような」前接表現の高頻度語

指示用法の語	頻度	割合
このような	193	20.1%
そのような	73	7.6%
以下のような	52	5.4%
どのような	40	4.2%
上記のような	21	2.2%
下記のような	12	1.3%
表に示｛す・した｝ような	11	1.1%
指示用法計	463	48.2%
総数	960	100.0%

ここで指示と呼んだものは、書かれた文中だけに指示対象を持つ用法である。上の（2）の用例では、場合がはっきりと言及されているにもかかわらず、「このときには」ではなく「このようなときには」が使われている。「ような」には、あえて指示対象を限定しない修辞的な用法という面も認められる。

４．１．２　前接表現と後接表現の組み合わせの特徴

次に、指示用法以外の「A ような B」において、A（前接表現）、B（後接表現）の特徴を見る。表 3 は後接表現の語を頻度順にあげたものである。以降の分析では「ような」の使用総数から指示用法を除いた 497 例のデータを分析する。

表 3　後接表現の頻度

順位	後接表現	頻度	割合	「の」接続	用言接続
1	場合	28	5.6%	2	26
2	症例	19	3.8%	1	18
3	症状	18	3.6%	8	10
3	痛み	18	3.6%	0	18
5	疾患	14	2.8%	8	6
6	もの	13	2.6%	8	5
7	状態	10	2.0%	2	8
7	運動	10	2.0%	0	10
9	病態	9	1.8%	2	7
9	頭痛	9	1.8%	0	9
—	その他	349	70.2%	110	239
計		497	100%	141	356

表 3 から、後接表現の名詞は多種多様であり、突出して頻度の高い語がないことが見てとれる。この点は次に見る「様」と異なる点の一つである。しかし、後接表現の語が名詞に接続するか、用言に接続するかによって使用頻度が大きく異なる語がある。たとえば、「痛み」が後

接表現の場合は 18 例あるが、すべて用言接続で、「の痛み」という接続はない。「痛み」「運動」「頭痛」のほか、「場合」「症例」等も用言接続がほとんどである。こうした語は叙述的な説明を要することがわかる。さらに用例を観察すると、後接表現の名詞が「痛み」「頭痛」「運動」等の場合は、前接表現が比喩的な用法になっている。それ以外は例示の用法と言える。ここでの比喩、例示関係というのは森山(1995)にならい、A と B が不一致の関係にある場合を比喩、A が B に包含される包含関係の場合を例示とする。

Ａ　前接表現が用言の場合

以下、前接表現が用言の用例を見ていく。表 4 は後接表現が痛みに類する語の場合の用例である。

表 4　後接表現が「痛み」類の比喩用法

前接表現	—	後接表現	頻度
（針で）刺される・刺す	ような	疼痛	6
バットでなぐられた	ような	痛み	3
しめつけられる・締め付ける	ような	頭痛	3
えぐられ｛る・た｝	ような	激痛	3
焼け付く・焼ける・灼ける	ような	痛み	3
裂ける	ような	痛み	2

「バットでなぐられたような痛み」は実際にバットでなぐられたわけではないため、「バットでなぐられた痛み」とは異なる。自分の痛みを人に伝えるには、その感覚を言葉で表現する必要があり、比喩が用いられる。これに類するものとして、頻度数は多くはないが、後接表現 B が「音」「声」「感じ」などの感覚名詞がある（表 5)。被修飾名詞が運動を表す場合も、比喩用法のことが多い（表 6)。

表 5　後接表現が感覚名詞の比喩用法

前接表現	—	後接表現
鼻を鳴らす，吠える	ような	声
引っかく	ような	雑音
咽頭内に焼ける	ような	感覚
雪を握った	ような	感じ

表 6　後接表現が運動類の比喩用法

前接表現	—	後接表現
丸薬をこねる	ような	動き
ねじる	ような	不随意運動
踊る	ような	不随意運動
払いのける	ような	動作
ひねるような,または雑巾をしぼる	ような	運動

「丸薬をこねるような動き」は、外見上「丸薬をこねる動き」と変わりがない可能性もあるが、動作主は丸薬をこねたり、踊ったりする意志はない点で、比喩と考えられる。

後接表現が形を表す表現の場合、外観について言及する点で「よう」の本義の例とも言える。以下の用例（5）（6）は、反事実という点で比喩ととれるが、（7）は、例示と言える。

(5) ポーターが後ろ手でチップを受け取るような手の形
(6) 子宮は（略）西洋梨を逆さまにしたような薄紅色の滑らかな形状で存在する。
(7) 本体を左腋窩下方（第 5〜6 肋間，中腋窩線上），リードを胸骨左縁に平行になるような形で植え込み，本体と皮下リード間で感知ならびに電気ショック治療を実施する。

後接表現が痛みの場合は比喩を使った表現を用いざるを得ないが、外観を示す形になると、話し手は聞き手にわかりやすいように、比喩を用いる場合も例示を用いる場合もあるということだろう。

後接表現の名詞が「場合」「とき」「症状」「疾患」「状態」などの場合は、その内容を前接表現で客観的に説明する。後接表現が名詞の場合ほど明確ではないが、広くは例示的な用法ととらえられる。

(8) 急性期 ・2：1 や 1：1 伝導で血圧低下や意識障害があるような場合は直流通電（カルディオバージョン）を行う.
(9) カルシウムやビタミン B_{12} などが欠乏しているようなときには，消化器症状が軽微であるとさらに早期発見が難しくなる.
(10) 症状が持続することで関節破壊や筋萎縮をきたすような器質性疾患ではないこと，（略）

B　前接表現が用言の場合の語末の品詞

前接表現が用言の場合の特徴を見るために、表 7 では、前接表現が用言である用例の前接表現末の短単位 1 語の品詞と高頻度の語をあげる。

表 7　前接表現末の 1 語

品詞	頻度	語	頻度
動詞-動詞一般	142	来す	17
		伴う	12
		言う	8
動詞-非自立可能	111	する	57
		なる	16
		できる	13
		いる	10
		ある	7
助動詞	97	れる・られる	34
		た	29
		ない	27
		せる	7

その他	147		
計	497		

「ような」の前接表現が用言の場合、その用言は現在形がほとんどで、過去形は少ない。また、助動詞では「た」形は少なく、受身表現が多い。これは、本多他（2020）の医学書の文末表現の結果と同じ傾向を示しており、「「医学書」では症状の典型例を解説する文、診断や治療のポイントを述べる文が多い」という傾向は「ような」の前接表現にもあてはまる。また、和語動詞が多く、サ変動詞は多くない。自分の痛みを人に伝えるには、その感覚を言葉で表現する必要があり、比喩が用いられる。そのときに選ぶ言葉は、生活に根ざした語のほうが理解されやすいため、比喩では和語動詞が多く使われていると考えられる。動詞の種類は様々だが、「来す」「伴う」の頻度が高い。

C　前接表現(A)が名詞の場合

次に前接表現Aが名詞の場合、すなわち「A のような B」の場合を見てみる。この場合、A の名詞は、薬品名、部位、疾患などの固有名詞が多い。

(11) （略）β－ラクタム系抗菌薬のような細胞内移行の悪い抗菌薬は無効である.
(12) そして，卵巣腫大がある場合は，黄体嚢胞のような貯留嚢胞と真性腫瘍とを鑑別しておく。
(13) トラウマ体験後に慢性化して来院する場合も多く，その場合にはうつ病や薬物依存症のような併存疾患への対応が優先されることもしばしばある.

こうした例では、前接表現は後接表現の一部をなしていると言える。また、次のような発話表現を受ける場合も例示と言える。

(14) （略）対応に苦慮していても「全く異常はありません」のような断定的な表現は避けたほうが無難である.

しかし、以下のように一般名詞の場合は、A が B に含まれ得ない比喩的な用法になることも多い。次に見る「様」表現につながっていく。

(15) 腹水があるとわかりやすく，よじれた紐のような構造としてみられる。
(16) 鉤あるいはヤギの角のような形状を呈する。
(17) V ネックセーターの首筋露出部にできる日焼けのような紅斑 e（略）
(18) 可能な限り単剤での治療を選択し，絨毯爆撃のような治療は選択しない.

４．２　接尾辞「様（ヨウ）」の特徴

接尾辞「様」と「ような」は、意味は重なるが、用法における大きな違いは、「様」は「腺腫様甲状腺腫」のような疾患名にも用いられることである。本研究では、疾患名は一語化された専門用語と考えて、分析対象から一旦除外し、分けて考えることにした。専門用語であるかどうかの判断は『医学大辞典』の見出し語を利用し、疾患名や症状を含め、見出し語として掲

載されているものは、一語化した専門用語とみなした。また、「ような」の分析にならい、「A様B」のAを前接表現、Bを後接表現と呼ぶことにする。

調査した結果、接尾辞「様」の用例は820例、そのうち、専門用語は245例であった。以下、820例から専門用語を除外した575例を分析対象として特徴を見ていく。まず後接表現を概観し、前接表現との組み合わせを見ていく。次に「ような」と比較する。

４．２．１　「A様B」におけるB（後接表現）の特徴

まず、後接表現の特徴を見る。表8は、後接表現の高頻度語である。高頻度語はすべて漢語であった。後接表現で最も頻度が高いのは「症状」で約26%を占める。2位以下の頻度は大きく減るが、表8の14語で約半数を占める。「皮疹」など具体的な症状名も見られるものの、上位には「症状」「所見」「変化」「構造」「運動」など、やや抽象的な意味を表す語が多い。これは、たとえる表現は、患者の様々な状態や外見、検査の画像などを材料に疾患や症状を特定していく過程に用いられる場合が多いからだと思われる（(19)(20)）。

(19) 3～15日間の潜伏期を経て，突然の発熱や感冒様症状で発症する．
(20) 超音波やＣＴで狭窄動脈に嚢腫様変化を認め，多くは多房性である。

表8　「A様B」のB（後接表現）高頻度語上位10位

順位	後接表現(B)	頻度	割合
1	症状	150	26.1%
2	皮疹	30	5.2%
3	所見	16	2.8%
4	変化	14	2.4%
5	顔貌	12	2.1%
6	物質	11	1.9%
7	病変	10	1.7%
8	構造	9	1.6%
9	運動	8	1.4%
10	陰影	7	1.2%
10	反応	7	1.2%
10	作用	7	1.2%
10	症候群	7	1.2%
—	その他	287	49.9%
計		575	100.0%

４．２．２　前接表現と後接表現の組み合わせ

次に、前接表現を後接表現別に見ていく。表9では、表8の高頻語の中から「症状」「皮疹」「所見」「変化」「顔貌」と、「運動」「陰影」を取り上げる。①は「A様症状」のA（前接表現）の高頻度語である。用例は、「感冒様症状（16.7%）」が最も多く、「インフルエンザ様症状

（16.0%）」、「アナフィラキシー様症状（11.3%）」を合わせた 3 表現で「A 様症状」の 44%を占める。「A 様 B」という形式で症状をたとえる場合、比較的日常的な疾患名や症状名が多く用いられていることがわかる。その他の後接表現については、用例数が少ないため、頻度のみあげる。ここでは、前接表現に疾患名以外の比較的一般的な表現を含む用例に注目し、頻度が低いものも参考として欄外にあげた。

②「A 様皮疹」では、「紅斑」「サーモンピンク」「むち打ち（鞭で打った）」「日焼け」など、皮疹の色や現れ方を表す前接表現が見られた。その他日常生活でも目にする語としては、③「A 様所見」の「蛇腹」「竹の節」、④「A 様変化」の「V 字」「敷石」、⑤「A 様顔貌」の「人形」「苦悶」「酩酊」、⑥「A 様運動」の「ペダル漕ぎ」「振り子」、⑦「A 様陰影」の「吹雪」「砂嵐」などがあり、外見や様子を説明する際に、様々な事物を利用していることがわかる。これらの一般的な表現が前接表現に用いられるときは、比喩的な用法になる場合が多い。

(21) 体幹に認めるむち打ち様皮疹も掻破刺激による。
(22) ミオトニア現象，前頭部禿頭や西洋斧様顔貌の確認。
(23) 胸部Ｘ線写真：両側肺野のびまん性浸潤影（吹雪様陰影）を認めることが多い。

頻度が低く表にはあげていないが、この他に比較的日常的な語を含む表現としては、「米のとぎ汁様下痢」「平手打ち様不規則紅斑」なども見られた。「西洋斧様顔貌」のような外国語の翻訳と思われる表現がある一方で「米のとぎ汁様下痢」などの文化的な表現があることも興味深い。

表 9　高頻度の後接表現(B)における前接表現(A)

①　A 様症状

順位	前接表現(A)	頻度	割合	A 様 B(575 例)に占める割合
1	感冒	25	16.7%	4.3%
2	インフルエンザ	24	16.0%	4.2%
3	アナフィラキシー	17	11.3%	3.0%
4	強皮症	4	2.7%	0.7%
4	筋炎	4	2.7%	0.7%
4	喘息	4	2.7%	0.7%
—	その他	72	48.8%	12.5%
計		150	100.0%	26.1%

②　A 様皮疹（頻度 30）

前接表現(A)	頻度
紅斑	6
毛嚢炎	4

サーモンピンク 1，
むち打ち 1、日焼け 1，

③　A 様所見（頻度 16）

前接表現(A)	頻度
蛇腹	3
SLE	2

竹の節 1

④　A 様変化（頻度 14）

前接表現(A)	頻度
巨赤芽球	2
Brugada	1

V 字 1，硝子 1，敷石 1

⑤　A 様顔貌（頻度 12）

前接表現(A)	頻度
西洋斧／斧	4
人形	3
先端巨大症	2
ガーゴイル	1
苦悶	1
酩酊	1

⑥　A 様運動（頻度 8）

前接表現(A)	頻度
胎児(の)呼吸	3
アテトーゼ	1
ペダル漕ぎ	1
振り子	1
振戦	1
痙攣	1

⑦　A 様陰影（頻度 7）

前接表現(A)	頻度
吹雪	2
菌球	1
血管	1
砂嵐	1
腫瘤	1
肺炎	1

４．２．３　「様」と「ような」の比較

後接表現について、「様」と「ような」を比べると、「ような」のほうが多様な表現を取ることがわかる。「ような」の後接表現の高頻度語（表 3）には和語も漢語も用いられ、最も頻度が高い「場合」であっても後接表現のうちの 5.6%である。それに対し、「様」の後接表現の高頻度語（表 8）は漢語が用いられ、最も頻度が高い「症状」は 26.1%と、「様」の約 4 分の 1 は「A 様症状」であることがわかる。

高頻度の後接表現において、「症状」は、「様」と「ような」のいずれにも見られる語である。「症状」の前接表現を比較してみると、「A ような症状（18 例）」の A は動詞（例　日常生活に支障をきたすような症状）が 10 例、名詞が 8 例であった。A が名詞のものを以下にあげる。「様」の前接表現はほぼ名詞で、動詞の連用形がわずかに見られた。表 9①で、「様」は比較的日常的な疾患名や症状名が見られると述べたが、「ような」と比較すると、固有名詞に近いものが目立つ。「ような」にも「過活動膀胱」や「脊椎関節症」などの疾患名が見られるが、その一方で、「耳鳴り」「胸やけ」など、日常生活で用いられる語も見られ、A に用いられる語の種類も多様である。

【A のような症状】

A：過活動膀胱、小児、脊椎関節症、鼻カタル症状、非代償期、（まるで）夢遊病者、耳鳴り　胸やけ（各 1）

【A 様症状】

A：感冒 25、インフルエンザ 24、アナフィラキシー 17、強皮症 4、筋炎 4、喘息 4

「A 様症状」では、上述のように A には固有名詞に近いものが目立つが、表 9⑥で示したように「ペダル漕ぎ様運動」や、表 9 ⑦の「吹雪様陰影」のように前接表現には日常的な表現も見られる。日常的な表現が見られるという点では「ような」と共通する点であるが、用言も前接する「ような」と比べると、「様」の前接表現は名詞であるため表現が短く、定型化しやすいと思われる。日常的な表現が用いられる場合、比喩的な用法になる場合が多いことは「様」と「ような」に共通する点である。

なお、医学では、疾患名に「様」が続く場合は、「様」がない場合と明確に区別されるという。「毛嚢炎様皮疹」のように前接表現に疾患名が入る表現では、診断が確定していないことを表すとのことである（医師との談話から）。このことは『医学大辞典』の記述からもうかがえる。たとえば、『医学大辞典』の「アナフィラキー」の項目中、「アナフィラキシーに類似するがＩｇＥ抗体を介さない反応にアナフィラキシー様反応（anaphylactoid reaction）がある。」

との記述がある。「様」の使用によって、その症状が特定の疾患のものかそうでないかを明確に区別するのは、医学特有の使い方であると同時に、そこには類似するという意味を持つ「様」の特性が生かされていると言える。「感冒様症状」は例示的な用法であるが、A（感冒）から容易に想像できる内容を、上位概念の B（症状）でまとめている。

４．２．４　専門用語との比較

最後に、本調査での「専門用語」との比較について触れておく。本分析では、『医学大辞典』の見出し語に掲載されている疾患名や症状名等の語を一語化した専門用語とみなして分析対象外としたが、医学書テキストにおける接尾辞「様」の用法を概観するために、ここまで分析対象としてきた表現との比較を行った。

専門用語を分析対象語と同じように前接表現、後接表現に分け、両者の異なりを比較した（表 10）。分析対象と専門用語、それぞれについて前接表現と後接表現の異なりを比較すると、分析対象語は、後接表現よりも前接表現のほうが多いのに対し、専門用語は前接表現よりも後接表現のほうが多かった。専門用語には疾患名や症状名が多いと思われるが、後接表現よりも前接表現のほうが少なかった理由として、「様」を用いた疾患名や症状名は語構成が定型化している可能性がある。

専門用語の前接表現における高頻度の表現は「髄様 B」「水様 B」「毛様 B」であり、後接表現における高頻度の表現は「A 様癌」「A 様便」「A 様下痢」であった。

なお、この比較は医学テキストで用いられている用例の範囲で行なったため、『医学大辞典』全体の語の傾向を示しているわけではない。また、本分析では『医学大辞典』の見出し語を専門用語の基準としたが、専門用語とそれ以外の語の境界は明確ではないため、詳細な分析は今後の課題である。

表 10　「分析対象語」と「専門用語」の語数

分類	延べ語数	異なり語数	
		前接表現(A)	後接表現(B)
分析対象語	575	298	199
専門用語	245	41	50
計	820		

５．まとめと課題

本発表で指摘した点を以下の 5 点にまとめる。

1. 医学書の「ような」表現は、前接表現が名詞の場合が約 6 割を占める。多くは文中でほかの箇所を指し示す用法、次に多いのは、後接表現の内容を具体的に説明する例示用法である。
2. 後接表現が感情・感覚名詞の場合、たとえば、「痛み」や「音」の場合に「ような」を使った比喩表現が用いられる。そこでは、医学の専門書ではあっても、日常遣いの平易な語が用いられている。
3. 医学書における接尾辞「様」は、後接表現に「症状」が占める割合は約 26%であった。後接表現が「症状」の場合「感冒様症状」「インフルエンザ様症状」「アナフィラキシー症状」のような日常的な疾患名や症状名が上位を占めた。

4. 医学では「様」の前に疾患名がおかれると、「様」がない場合の疾患とは明確に区別されるという。医学特有の使い方と言える。
5. 「ような」と「様」の違いは「ような」のほうが前接表現に用言や和語を用いた多様な表現が用いられ、表現の自由度が高い。「用言＋ような」「のような」「様」と前接表現の叙述性が薄れるにつれ、後接の表現が固定化していき、一語性が強まることが明らかになった。

医学という専門性の高い分野の専門書でありながら、医学書には日常遣いの語によるたとえる表現が多く見られる。そこには、患者と医師とで症状を理解・共有しなければならないという医学の一つの側面が現れている。「ような」「様」というつなぎ語は、その有効な手段となっていると言える。今後、この他のたとえる表現も調べていきたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP18H00679 の助成を受けたものです。

文献

今西寛子（1985）「ようだ」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法 7 巻　助辞編（三）』明治書院，pp.92-94.

国立国語研究所（1987（初版は 1951））『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』国立国語研究所報告 3　秀英出版

田中章夫（1971）「ようだ」松村明編『日本文法大辞典』明治書院，pp.891-892.

寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集I』くろしお出版

野村雅昭（1978）「接辞性字音語基の性格」『電子計算機による国語研究 9』pp.102-138. http://doi.org/10.15084/00001057

本多由美子・丸山岳彦・三枝令子（2020）「医学書テキストに現れる文末表現の特徴―単語 N-gram を用いた分析―」『言語資源ワークショップ発表論文集』(5) pp.73-84.国立国語研究所. http://doi.org/10.15084/00003147

前田直子（2006）『「ように」の意味・用法』笠間書院

森山卓郎（1995）「推量・比喩比況・例示　―よう/みたい」の多義性をめぐって―」『宮地裕・敦子先生古稀記念論集　日本語の研究』明治書院，pp.493-525.

安田芳子（1997）「連体修飾形式「ような」における＜例示＞の意味の現れ」『日本語教育』92 号, pp.177-188.

調査資料

医学書院編（2018）『今日の治療指針　2018 年』医学書院

伊藤正男・井村裕夫・高久史麿総編集（2010）『医学書院医学大辞典　第 2 版』

岡庭豊・荒瀬康司・三角和雄（2019）『イヤーノート 2020　内科・外科編』メディック・メディア

金澤一郎, 永井良三 総編集（2015）『今日の診断指針　第 7 版』医学書院

『デジタル大辞泉』小学館、「コトバンク」利用（2021 年 8 月 6 日閲覧）

『日本国語大辞典』小学館、「ジャパンナレッジ」利用（2021 年 8 月 6 日閲覧）